

平成3年度  
学術研究・演奏会助成研究経過報告書

## 発表会報告

高橋 滋子

平成3年6月7日（金）に大阪倶楽部において、第9回 ROUND T 作品発表を行いました。

4名、5作品による発表会で、私は歌曲作品

サトウハチロー詩「秋に生れた雀の子」「秋のかあさん」

西條八十詩「怪我」

服部嘉香詩「子守唄」

山崎澍朗詩「陽炎と葬列」

の以上5曲を発表いたしました。

演奏者はメゾソプラノの荘田作氏にお願いいたしました。とても熱心に取り組んで下さり、当夜は実に完成度の高い、感動的な演奏となりました。聴衆の反応も素晴らしく、作曲家としては非常に満足のいく結果で良い発表が出来たと存じます。

個別研究費の助成を頂き、誠に有難うございました。

以上ご報告申し上げます。

## 研究課題の演目報告

山田 健司

演 目 モーツァルト作曲「フィガロの結婚」

日 時 1991年6月7日、9日

場 所 尼崎・アルカイック大ホール

スタッフ 指揮 高関 健

演出 栗山昌良

キャスト フィガロ 山田健司

制 作 関西二期会

上記演目を研究課題と致しまして、個別研究助成をお認めいただきました。長年、この役を持役としまして、十数回歌ってまいりましたが、今回の特徴と申せば、演出の際立った様式化にあったと思います。動きを最小限におさえ、音楽及びレチタティーヴォの言葉

に大きな重点を置いたことで、歌い手側の言葉に対する意識がかなり強められた事、これが今回の大きな収穫でした。

おかげ様で好評のうちに終える事が出来ました。ここに御報告させていただきます。

## 助成公演報告

門屋 菊子

泉のようなひびきのもついずみホール。設備も行き届いたものでリサイタル・ホールとしては関西随一でしょう。そこでの助成公演は心ゆくまで演奏に専念できました。日本の生んだ不世出の作曲家山田耕筰と白秋のコンビによる「AIYAN の歌」。ガラリと趣を変えて、林光曲「ソング」。ドヴォルジャーク「ジプシーの歌」。ムソルグスキー歌曲集「子供部屋」の4ステージを持ちました。

特にドヴォルジャーク、ムソルグスキーの演奏を考慮して東京から名ピアニスト「小森谷泉」氏を迎える事が出来たのは幸運でした。氏は世界の各種のコンクールに優勝されており、その実力の程は周知の事実であります。テクニックは申すまでもなく、音色もオーケストラの様でダイナミックでもあり充分ドラマが伺われ、本番は思い切り日頃の研鑽が発揮できたと確信しております。

## 米国中西部小都市の居住パターンにみられる民族的特質の変化

佐野真理子

本研究は、研究者が、長期研究調査企画として行っている「米国中西部小都市および周辺地域にみられる民族集団間関係の変化」の一環である。この長期研究調査企画の特徴は、アメリカ社会における民族集団の研究に、文化人類学の領域の中のこれまで行われてきた民族誌的実地調査に加えて、国勢調査の原簿、土地台帳といった歴史的資料を用いることによって、民族集団間関係の長期間にわたる変化を検討することにある。また、家族史のような個別の質的資料を通して得られた変化の模様を、その地区全体の量的変化の中に位置づけることによって、民族集団間の相互作用のダイナミクスが、より鮮明に理解できる。対象としている地域は、研究者が1984-87年に民族誌的実地調査を行った米国ウィスコンシン州の小都市リヴァーフロントとその近郊の農村部で、19世紀後半から現在にいた

るまでの民族集団間の社会・経済的地位の変化を中心に考察する。

当研究の一部は、平成元年度相愛大学人文学部特別個別研究として助成を受けた。平成元年度には、主に農村部の資料を分析した。平成3年度は、主に都市部の資料を分析した。

平成3年度は、リヴァーフロント市の都市部を対象として、都市での居住パターンに見られる住民の民族的特質、職業、家族構成の変化を中心に検討した。リヴァーフロント市の中でポーランド系住民が多い地域（D区）と、極端に少ない地域（E区）を選び、1880年度と1910年度の国勢調査の原簿と市民名簿（1900-1985年）に記載されているD区とE区に関するマイクロ・フィルムの情報をプリント化し、コンピューターに入力してデータベース化した。

現時点では、上記の資料の分析から得られるこの地域全体の量的変化と、D区、E区に住むポーランド系（3家族）、アングロ・サクソン系（2家族）、スカンディナヴィア系（2家族）住民の家族史を照らし合わせることによって民族集団の特性とそのステータスの変化を明確化しているところである。

分析の内容については、学術論文にまとめて発表の予定である。

## チャタレイ裁判に関する雑誌記事の蒐集

北崎 契縁

6,000件余りにのぼるチャタレイ裁判（昭和25年）及びそれをめぐるその前後の様々な雑誌（新聞）記事の蒐集・コピーを東京都にある財団法人「大宅荘一文庫」を借りて行なった。（1991年9月～10月）

例えば、「毎日グラフ」（1951.6.1）の同年5月8日に行なわれた第一回公判についての記事では、起訴状そのものが「稀代の迷文」として批評される始末となった、とある。この時の傍聴人坂口安吾は、「チャタレイ夫人の恋人という小説は決した汚らしい体臭を放っているものではないがこの起訴状が放っている体臭は助からないね。あの小説をこれほど汚らしく読む人が実在することは意外であった」と酷評している。少し時代を下ると、大宅荘一は「この事件に対する二つの立場は、初めから対立している。…文学者とPTA的立場…」（「週刊東京」、昭和32年4月6日）といみじくも指摘しているが、要するに、表現の自由を求める文学者と社会秩序の維持に重点を置く裁判所側の対立というよりは、むしろ「すれ違い」こそがこの有名な裁判の出発点であったことが改めて理解できるのである。

もっとも最近（1992年現在）では「芸術性が高いものは警告しない」と警視庁では申し

合わせているようであるが、荒木経惟カメラマンによる作品は「猥褻性の疑いがある」として警告している。といっても、両者に「すれ違い」のあることには変わりはない。恐らく、「文学・芸術」と「検察・警察」のいたちごっこは今後も続いていくだろうが、チャタレイ裁判（敗訴ではあったが）を契機として昭和40年前後から「猥褻性」に対する日本人の意識も変わってきたように思われる。

ともあれ、昭和25～28年にかけて争われた「チャタレイ裁判」をめぐる、文学者、検察・裁判所、弁護士、また一般庶民ならびにジャーナリズム界を巻き込んで繰り広げられた様々な反響の歴史を、今回得た資料を使って整理・分析し、その成果を『研究論集』に掲載する予定である。

## ヴィクトリア中期におけるインド植民地支配の研究

今田 秀作

従来通説的に「自生的」・「内発的」な発展として類型構成されてきたイギリス近代史を再検討する上で、「植民地の中の植民地」インドと本国との歴史的交渉が、重要な検討対象の一つであることは衆目の一致するところである。私は、19世紀中葉におけるインド植民地支配構造を解明すべく、本年度はさしあたりインド西部地域（グジャラート・デカン）の社会構造の変容について分析を進めてきた。一般的に研究蓄積の薄いインド史研究の現状にあっては、最大限一次資料の収集に努めることが肝要であるが、私は夏季休暇を利用して50日間イギリスに滞在し、旧インド省図書館（India Office Library and Records）、ロンドン大学東洋アフリカ学院（School of Oriental and African Studies）および歴史学研究所（Institute of Historical Research）、大英図書館（British Library）等を中心に精力的な一次文献の収集を行い、大量のフォトコピーおよび数十本のマイクロフィルムを持ち帰ることができた。帰国後、既入手の文献の検討と合わせ、これらの資料の分析に着手し、まず『相愛大学研究論集』第8巻（平成4年3月）に「植民地統治期グジャラート農村経済の変容」と題する論文を公表することができた。ここでは、19世紀中葉以降の英領グジャラート農村経済の変容の最も基礎的な側面、すなわち栽培作物パターン、農業の技術設備、土地所有態様、農業労働者の態様、農家副業の展開等について実証分析を行い、その結果、農民的商品生産の顕著な発展、および決して順調とはいいがたいとはいえ、農民層分解の一般的傾向を検出することができたと考えている。続いてデカン地域を対象とした分析を、同論集第9巻に、論文「植民地統治初期ボンベイ＝デカンにおける村落共同体と地稅制度改革」として纏めた。現在イギリスの歴史学会を中心に、植民地支配の現地社会

に与えた影響力を過小評価する「連続説」が力を得ているが、単なる二分法に陥らない、一層精緻な実証研究が求められているとの見通しを持つことができた。

## 女子学生の体力格差から見た体育、スポーツに対する意識構造の相違

長野 孝男

本研究は、女子学生に対する体育、スポーツに関する実態調査結果と、体力側定評価結果との関係を分析検討し、そのことにより、体力格差が、学生の「体育、スポーツ」に対する意識にどう影響を与えているかを知ることによって、今後の学生の体育、スポーツのあり方に対して、示唆を与えてくれるものと考え、本研究にとりくんだ。

研究結果を、第41回日本体育学会の教育学分会に発表（会場 岡山大学）。

これらのデータと、本学学生の調査データを比較検討したものが、本論集（平成4年度）に発表した論文である。

最後に、本研究に対して特別助成していただき感謝している。

## カリフォルニア大学バークレー校所蔵仏教文献に関する研究

前田 至成

米国の大学中で最大のアジア関係文献を所蔵するカリフォルニア大学バークレー校の総蔵書数は700万冊をこえる。キャンパス内の23ヶ所の図書館では収容しきれないため校外の Richmond の倉庫などを利用してアジア関係文献が収蔵されている。私の調査はアジア関係文献の中でも特に貴重なコレクションとされる「三井文庫」に見られる仏教文献の研究である。

三井文庫本がバークレー校に買い取られたのは1950年（昭和25年）のことであり、大正5年に三井家が家史編纂所として現在の国文学資料館の場所に「三井文庫」を発足させ、昭和24年まで管理した約10万冊に及ぶ蔵書がバークレー校の所蔵に帰した。その内訳は三井文庫の参考図書として用いられた三井各家の基本図書20000冊、昭和6年に三井文庫が購入した東大医学部教授であった土肥慶蔵氏（鶯軒、1866～1931）の蔵書の医学、哲学、言語、漢詩文など28000冊、京都の三井新町家の八代目宗辰（1845～1922）の収集した文学、歴史の書などを中心とした22742冊、三井文庫の中では貴重書扱いの地図、地誌など

2000点、それに浅見倫太郎氏（1869～1943）の収集した朝鮮本など6737冊、更に三井高堅によって収集された法帖・広本類が500点などである。これらの他にも東洋言語学部の置かれている Durant Hall の地階収蔵室には約8000点の写本があり、現在は東アジア図書館長の Dr. Donald Shively 氏の下で日本から渡米された慶応大学出身の石松久幸氏が図書館主事として、研究者の便宜に応じておられる。三井文庫本はパークレー校に移った当時の保管状況が完全でなかったためか、私自身もキャンパス内の各図書館内の一般書の中に「三井家蔵書」の印の付された書物を度々散見した。特に中央図書館内にある Pediorical room の日本関係書棚の三井家蔵書の数は可成りの数に上っていた。

いまここでは三井文庫の中の未整理の写本のうち仏教関係文献の一部を記して、読者の参考に供したい。

- 1 『三観答話』 1 巻・嘉永 4 年自序
- 2 『仁和寺御伝』 2 巻・文禄 2 年亮淳
- 3 『伝法灌頂教授作法』 1 巻・玄探写
- 4 『切支丹根本由来実記』 1 巻
- 5 『十一面観音修法口訣』 1 巻
- 6 『印度蔵志』 1 巻・平田篤胤・巻下
- 7 『四宗法要』 1 巻
- 8 『円戒念仏一致章并破一念義』 1 巻
- 9 『夢中間答』 2 巻（下巻欠）
- 10 『妙法蓮華経』 8 巻・元禄 5 年助右衛門写
- 11 『摩訶止観提要』 1 巻・明治44年写
- 12 『梅田村おもと』 1 巻・天明 8 年
- 13 『永平禅師語録』 1 巻
- 14 『浄巖院宗論之巻物写』 1 巻・天正 9 年
- 15 『為盛発心因縁』 1 巻・安居院慶念
- 16 『理趣経口文』 1 巻・弘化 4 年写
- 17 『真言宗之事業』 1 巻・明治43年実穀師行状
- 18 『稟承余草』 2 巻・真宗の秘訣37箇条
- 19 『禅林閑話』 1 巻・大正 2 年抜書
- 20 『紫朱書』 1 巻・宝暦13年积大我著
- 21 『翻迷集』 2 巻・真宗東西分離の事
- 22 『興正寺本願寺本末論』 1 巻・明治 1 年黙雷
- 23 『変成男子之記』 3 巻・畑銀鷄自筆

- 24『貞和四年法灌頂記』3巻・貞和4年・文海著
- 25『身延中山両流御符抄』1巻・文政5年・泰琢日調花押
- 26『金光山永明寺釈迦牟尼略縁起』草稿1巻・享和2年・仏弟子了秀写
- 27『信心銘随聞記』1巻
- 28『宝篋印陀羅尼経解説』1巻・河内金剛寺蔵の解説、活版
- 29『大般若波羅蜜多経』2巻・元禄4年写
- 30『金輪王仏頂略念誦法』1巻・玄探写

研究成果（研究発表及び研究報告）

- 1. 「日本中世における唯識思想の研究Ⅰ」（平成2年12月共同研究）『仏教文化研究所紀要』第29集所収。
- 2. 「日本中世における唯識思想の研究Ⅱ」（平成3年12月共同研究）『仏教文化研究所紀要』第30集所収。
- 3. 「甘露味論における心と形」（平成3年10月20日大正大学での「日本仏教学会学術大会」にて口頭発表）
- 4. 「「小毘婆沙」の考察」（平成4年9月13日淑徳短期大学での「日本宗教学会第51回学術大会」にて発表・出稿中）

## 特別研究費使用報告書

蔭木 英雄

平成3年11月1日、思文閣出版より『中世風狂の詩——一休『狂雲集』精読抄——』（定価4,944円）を出版し、その出版補助金として参拾万円を頂き、同額を出版社に支払いました。ここに報告致します。

## 弄璞集の研究

中西 健治

弄璞集ろうはくしゅうの著者は南可、良玄、消蘊子と号した。賀茂に住み、金閣寺の鳳林承章と親交があり、彼の日記『隔蓑記』（寛永13年～寛文8年）にしばしば記されながら、その実像



が断片的にしか判明しない人物であった。南可は狂歌、俳諧、漢詩、和歌などさまざまな文芸を嗜んだ風流の士ではあったのである。今般の研究対象とした弄璞集こそは、南可の家集であり、かつ5冊中4冊は南可自筆本であった。そこに収められた三千余首から南可自身の生涯を探り得ることはもちろん、近世初期文芸のあり様の一斑を窺うことも可能となり、また南可の筆蹟を辿ることからの副産物（万治2年序刊『歌枕名寄』を編刊上梓し全39冊の板下を清書したのは南可であることが判明した）も得られた。そこで特別研究助成を得て下記の成果をおさめることができた。

- (1) 著書『弄璞集 本文と索引』（和泉書院刊・A 5・320頁）（解題等を収載）
- (2) 論文『『弄璞集』補注——「秋夕和歌」について——』（「相愛大学研究論集」第8巻）
- (3) 論文「良玄『弄璞集』所収『伊勢参宮私記』——本文・私注——」（「論叢ゆほびか」創刊号）

## 正倉院写経所関係文書の復元的研究

山本 幸男

正倉院文書の大半を占める写経所関係文書の研究は、近年とみに進展し、従来余り知られなかった天平～宝亀年間（729～780）の天皇・皇后・皇太后・皇太子らの発願による写経事業の実態やそれに従事する下級官人の動向が、かなり具体的に描かれるようになった。限られた史料を対象とせざるをえない古代史研究にあって、写経所関係文書の研究は、新たな古代史像を提示しうる力を秘めているといっても過言ではなからう。しかし、これらの龍大な文書群は、幕末から明治にかけて行われた「整理」によって原形が大きく崩されており、それ故、写経所関係文書を利用するには、それらの文書を原形に復するという固有の作業が必要となる。復原作業は東京大学史料編纂所や宮内庁正倉院事務所などによる原本調査によって少しずつ進んでいるが、完了にはまだ相当の年月が必要であり、またより効果的な復原をめざすためには、各文書の伝える写経事業の実態を解明しなければならない。

このような状況にあって、一古代史学徒として写経所関係文書の研究にとりくむ場合の方法は、刊本の『大日本古文書（編年文書）』25巻と宮内庁書陵部頒布の正倉院文書マイクロフィルム紙焼写真をもとに、各写経事業の文書を収集・整理し、紙焼写真を使って可能な限りそれらを復原していくというもので、労多くして実少なしが実情であるが、そこから今まで全く気付かなかった生々しい実像が見えてくるのもまた事実である。この度、特別研究助成をうけて紙焼写真入手の便宜をえ、自分なりに天平宝字二年（758）の四つ

の写経事業の関係文書の整理・復原とその実態の解明にとりくむことができた。その成果の一部は次の形で公表する予定である。

天平宝字二年における御願経・知識経書写関係史料の整理と検討（『正倉院文書研究』

1号〈1993年刊行予定〉に前半を掲載。後半は『同』2号に掲載）

写経事業より見た天平宝字二年の藤原仲麻呂政権（1993年に成稿予定）